### 統治体の任命に関わる期間

「7 イエスは王として即位して間もなく，追随者たちを，なすべき膨大な仕事に備えさせました。この本の2章で考えたように，イエスは1914年から1919年初めにかけて，検分と清めの業を行ないました。（マラ 3:1‐4）そして，1919年に忠実な奴隷を任命し，追随者たちの間で指導の任に当たらせます。（マタ 24:45）その時以降，忠実な奴隷は霊的食物を分配してきました。大会での話や出版物を通して，クリスチャン一人一人には宣べ伝える責任があることを繰り返し強調してきました。」―『神の王国は支配している』61頁．

* 1914年～1919年は、「検分と清めの業」が行われた期間であり、重要とされる。

### 1914年、異邦人諸国家が滅ぼされる

「こうした事実のゆえに，チャールズ・T・ラッセルは1879年の7月に独自の宗教誌を発行し始めたとき，彼はその雑誌を「シオンのものみの塔およびキリストの臨在の告知者」という題名で発行しました。彼はマタイ 24章3節その他の箇所のギリシャ語パルーシアを「来る」ではなく，「臨在」と訳出したウィルソンのエンファチック・ダイアグロット訳にすでに精通していました。その新しい雑誌は，キリストの見えない臨在が1874年に始まったことを告げ知らせました。その臨在は1914年における異邦人の時の終わりまで続き，**その年には異邦人諸国家が滅ぼされ**，「貞潔な処女」級の残れる者は，死んで霊者として命に復活させられることによって，天にいる彼らの花婿とともに栄光を受けるものと考えられました。こうして，五人の賢い処女で表わされた級の人たちは，戸口を通って中に入り，結婚式に連なるのです。」（『千年王国』1974年、p.184）

#### ラッセルが予言した7つの重要な事柄―『時は近づけり』76~77頁

本章では、聖書の根拠に基づいて、異邦人の時、すなわち異邦人の統治の期間が1914年に終結すること、そしてこの1914年が不完全な人間たちによる統治の終わりであることを示す。これが聖書によって打ち立てられる事実であると言えるならば、以下のことが証明されるのである。

第一に、この年には、我らの主が「王国が来ますように」と祈るようにと言われた、あの神の王国が完全にして統括的な権力を持ち、地上に「立てられる」、現存する諸機関の瓦礫の上に樹立されるであろうということ。

第二に、こうして支配権を取るべき方がその時地の新しい支配者として現れるであろうということ。そしてそればかりでなく、この方はそのかなり前から姿を現すであろうということ。この方があたかも陶器師の作る器のように彼らを打ち砕くことで異邦人の支配体制は打倒され（詩篇2:9，啓示2:27）、そこに義なる政府が打ち立てられるからである。

第三に、神によって認められたキリストの会衆あるいは「王なる祭司」「キリストの体」、これに属する最後のメンバーが、1914年が終わる前頃に、王と共に天の栄光を受けるであろうということ。このメンバーはキリストと共に王国を受け継ぐ者たちであり、すべてキリストと共に統治を行うからである。これが全員揃わなければ王国が完全に「立てられる」わけにはいかない。

第四に、この1914年以降、エルサレムはもう異邦人たちによって踏みつけられることはなくなり、神の不興を蒙っていた状態から神を讃えるべく立ち上がるであろうということ。「異邦人の時」が満ちるからである。

第五に、1914年まえに、あるいはもっと早い時期までに、イスラエルはかたくなさから解放され始めるであろうということ。「一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人が全部救われるに至る時まで」（ローマ11:25）、つまりキリストの体あるいは花嫁になる者に含まれるべき異邦人たちが全員選ばれてしまう時までだからである。

第六に、「国々が始まって以来起きたことが無いような大きな患難」がその頂点に達し、世界規模で無政府状態が生じ、そして人は静まってエホバが神であること、全地にあがめられることを知るであろうということ（詩篇４６:１０）。その時には、海には波が荒れ狂い、地は溶け、山は崩れ、天は燃えるというように象徴的な言葉で語られていた状態が過ぎ去り、平和な祝福に満ちた「新しい天と新しい地」を認める人も患難にあえぐ人類の中から出てくることになるであろう。しかし何よりも、主に油注がれた者と義なる権力が、まず神の子たちによって大艱難のさなかにありながらも認められるだろう。これは年代図ではMおよびTと示してある級である（第一巻235頁から239頁参照）。続いて患難が終わろうとする時に肉のイスラエルがこれに気づき、最後には全人類がこれを認めることになるであろう。

第七に、この1914年に至るまでに、神の王国が権力のうちに組織立てられ、地にあって異邦人の像を打ちこわし、これらの王たちの権力を完全に失わせるであろうということ。この王国と権力と支配が確立されるにつれ、その様々な影響力や代行人によって「存在する権力」―教会のものであれ、世俗のものであれ、打ち砕かれて鉄と粘土と化す。

#### 予言の要点のまとめ

1. 1914年には、神の王国が完全にして統括的な権力を持ち、現存する諸機関の瓦礫の上に樹立される
2. その年に支配権を取るキリストが現れるが、実際にはそのもっと前から姿を現すであろう。
3. キリストの会衆は、1914年が終わる前頃に、王と共に天の栄光を受ける。
4. 1914年以降、エルサレムはもう異邦人たちによって踏みつけられることはなくなる。
5. 1914年まえに、あるいはもっと早い時期までに、イスラエルはかたくなさから解放され始める
6. 大艱難が頂点に達し、世界規模で無政府状態が生じる
7. 1914年に至るまでに、神の王国が建てられ、異邦人の権力が完全に失われる

#### 現代のものみの塔の説明

 [彼らは，早くも１８７０年代に，七つの時が１９１４年に終わることを指摘していました。 （ダニ４：２５。 ルカ ２１：２４） 当時の兄弟たちは，その注目すべき年にどんな意味があるかを十分に理解していたわけではありません。 それでも，知っていた事柄を遠く広くふれ告げました。今のわたしたちもその益を受けています。」（『神の王国は支配している』15頁）

* 「その注目すべき年にどんな意味があるかを十分に理解していたわけではありません」とあるが、その年にどんな意味があるのかは、非常に明確に教えられていた。

「1914年のずっと前から，聖書研究者たちは，その年に苦難の時が始まると述べていました。 そして，事態はまさに彼らの予告どおりになりました。」―『神の王国は支配している』22頁

* 「その年に苦難の時が始まると述べていました」とあるが、実際には、その年に大艱難の苦難が最高潮に達し、その年までに神の王国の支配が開始されると予告されていた。
* 「事態はまさに彼らの予告どおりになりました。」とあるが、ラッセルが1914年に起きると予告した7つの事柄は全て外れた。
* 「異邦人の時の終わり」は、「異邦人の体制が滅ぼされる」「エルサレムが異邦人の支配から開放される」という意味で語られていた。

### ～1914年、臨在のしるしははっきりと見えている

「我々の見解が偏見で歪められていなければ、神の言葉という望遠鏡をきちんと調整することで**「主の日」に起こることになっている様々な事柄の特徴をはっきりと見る**ことになろう。すなわち、**我々はまさにこれらの事柄の真っ只中にある**こと。そして「大いなる主の怒れる日は来たり」ということ。―『The Time is at Hand』（時は近づけり）101頁

#### 現代のものみの塔の説明

**1914年に聖書研究者はキリストの臨在のしるしを識別し始めた**―『神の王国』20頁。

* 「**1914年に聖書研究者はキリストの臨在のしるしを識別し始めた」とあるが、聖書研究者たちは、**1800年代後半から、主の日のしるし（キリストの臨在のしるし）がはっきりと見えている、と主張していた。

### 1915年：この世界が終末を迎えることは揺るがぬ真理である

この異邦人の時に関する聖書からの**強力な証拠に基づき**、次のことは**揺るがぬ真理である**と考える。すなわち、**1914年の終わりに、この世界にある王国の数々は終末を迎え、代わって神の王国が打ち立てられる**ということである。そしてこの聡く公正なる体制のもとに地は主の栄光、智恵、義、そして平和で満たされるであろう。（詩篇72:19、イザヤ6:3、ハバクク2:14）。神の御心が「天に行われる通り、地にも行われる」ことになる。―『時は近づけり』1910年、101頁

この異邦人の時に関する聖書からの**強力な証拠に基づき**、次のことは**揺るがぬ真理である**と考える。すなわち、**1915年の終わる頃の時期に、この世界にある王国の数々は終末を迎え、代わって神の王国が打ち立てられる**ということである。そしてこの聡く公正なる体制のもとに地は主の栄光、智恵、義、そして平和で満たされるであろう。（詩篇72:19、イザヤ6:3、ハバクク2:14）。神の御心が「天に行われる通り、地にも行われる」ことになる。―『時は近づけり』1914年、101頁

* もともとは、1914年に終わりが来ることが「揺るがぬ真理」だと断言されていた。
* 1914年になると、「1915年に終わりが来ることが揺るがぬ真理」だと断言し直した。

### 1918年中に、神が教会と何百万人もの会員を滅ぼす

「また、1918年に、神が教会や何百万人もの教会員を滅ぼす時、脱出する人々はキリスト教の崩壊の意味についてラッセル牧師から学ぶようになるだろう。」―『終了した秘義』485頁。

#### 現代のものみの塔の説明

「第一次世界大戦が行なわれた1914‐1918年の迫害の期間中，その世界戦争がそのまま世界革命ひいては無秩序状態のハルマゲドンに至る，と考えた油そそがれたクリスチャンがいました。 彼らが大いに驚いたことに，第一次世界大戦は1918年11月11日，突然終わりました。しかしながら，大いなるバビロンは依然存続し，ハルマゲドンの戦いも到来しませんでした。」（『秘義』1976年、p.69）

* 「ハルマゲドンに至る、と考えた油そそがれたクリスチャンがいました」という表現は、当時の一部の人々がそう考えていた、ということを示唆する表現だが、実際には会長のラザフォードが予言していたことであり、ものみの塔協会全体の総意として語られていた。
* 単に「考えていた」だけでなく、「終了した秘儀」の広範囲な配布により、広くふれ告げられていた。この違いは大きい。

### 1925年：昔の預言者たちの復活を確信をもって期待できる

「1920年の"Millions Now Living Will Never Die"（「現存する万民は決して死することなし」）という小冊子は，「1925年には，アブラハム，イサク，ヤコブや昔の忠実な預言者たちが[死者の中から]……人間としての完全な状態に戻って来ることを**確信をもって**期待できる」と述べていました。1925年には昔の忠実な人々の復活が予想されていただけでなく，油そそがれたクリスチャンがその年に天の報いを受けることを期待していた人もいました。1925年は過ぎて行きました。中には，希望を捨てた人もいました。」（『ふれ告げる』1993年、p.77）

「私たちが1925年について期待できる事柄として，同兄弟の述べた間違った陳述について，兄弟はかつてベテルで私たちに，『全くばかなことをしてしまった』と告白したことがありました。」（塔1984年10月15日号、p.31）

### 1941年：ドイツはハルマゲドンで滅びる

ドイツの国民は、立たされた苦境に目覚め始めている。・・・彼らは、近い将来もたらされるもの、急いで訪れようとしているものに対して、不安に満ちている。それはつまり、全能の神の大いなる戦い、ハルマゲドンである。」（『慰め』1941年10月29日号、11頁

#### 現代のものみの塔の説明

「第二次世界大戦中，ウクライナ西部の兄弟たちは一時的に組織とのつながりを絶たれ，進むべき方向を見失ってしまいました。第二次世界大戦の勃発がハルマゲドンの始まりを意味していると考えた人もいました。その教えは，しばらく兄弟たちの間に誤解を生じさせました。」―『年鑑』2002年 143頁

* 「ハルマゲドンの始まりを意味していると考えた人もいました」という表現は、当時の一部の人々がそう考えていた、ということを示す表現だが、実際には会長のラザフォードが公式の雑誌で予言していたことであり、ものみの塔協会全体の総意として語られていた。

### 1975年：至福千年期が来る

「しかし，神を恐れ，聖書つまり古代のヘブル語聖書とクリスチャン・ギリシア語聖書の双方を研究する人々にとっては，はるかに重要な別の千年期が近づいています。それは第七千年期です。・・つまり，神が完全な人間男女をエデンの園で創造された時を起点とした第七千年期です。・・・このことは一千年の平和もしくは平和の千年期が近づいていることと関係がありますか。明らかに関係があります！」（『ものみの塔』1970年1月1日号、14頁）

「前述の証拠があるにもかかわらず，至福千年期が実際に近づいたこと，そうです，わたしたちの世代のうちに始まることを確信させられるに足る「しるし」を要求する懐疑的な人は少なくありません。わたしたちは，イエス・キリストがメシアであることを確信させられるに足るしるしをイエス・キリストに求めた，19世紀前の律法学者やパリサイ人のあの「邪悪で姦淫の世代」の者ではありません。（マタイ 12:38，39）。」（『千年王国』1974年、p.162）

そうです。1971年9月以来，開拓者の人数はただ1か月を除いてあとは毎月新最高数を記録し続けており，今日本では正規および特別開拓者は合計3,859人という空前の新最高数に達しました。・・・家や資産を売って，開拓奉仕をしてこの古い体制における自分たちの残りの日々を過ごそうとする兄弟たちのことをよく耳にしますが，確かにそれは，邪悪な世が終わる前に残された短い時間を過ごす優れた方法です。―ヨハネ第一 2:17。」（『王国宣教』74年6月、p. 3）

#### 予言の失敗に対する対応

エホバの証人の出版物は，聖書の年代記述から考えて人間存在の満6,000年は1970年代の半ばに終わるということを示してきました。しかし，それらの出版物は，その時に終わりが来るとは一度も述べていません。それにもかかわらず，この問題に関してかなりの個人的推測がなされてきました。」（塔1975年1月1日、27-28頁）

* 「終わりが来るとは一度も述べていません」とあるが、1975年は、明らかに世の終わりと関連付けて教えられていた。
* 「この問題に関してかなりの個人的推測がなされてきました」とあるが、1975年にどんな意味があるのかについては、書籍や雑誌を通して明確に教えられていた。

「エホバの証人がイエスの二度目の到来を切望するあまり日付を示唆し，あとで間違いであることが分かったことが何度かあります。このため，ある人々はエホバの証人を偽預言者と呼んできました。しかし，これらの出来事のうち，証人たちがあえて『エホバの名において』予言したことは一度もありません。また，『これはエホバの言葉である』と言ったことも一度もありません。エホバの証人の公式機関誌である「ものみの塔」誌は，「我々には預言の賜物はない」（1883年1月号[英文]，425ページ），「我々は自分たちの著作を崇めたり，絶対に正しいものとみなしたりはしない」（1896年12月15日号[英文]，306ページ）と述べています。」（目93年3月22日、p.4）

* 「我々は自分たちの著作を崇めたり，絶対に正しいものとみなしたりはしない」とあるが、これまでに確認してきた予言の数々は、いずれも「揺るがぬ真理」「確信をもって」『明らかに関係がある』などの表現によって絶対的に正しいものとされてきた。
* 「エホバの名において語ったこと」を否定しているが、別の記事では、自分たちが「エホバの名によって語る民」であることが断言されている。

「**今日エホバの名によって語るわたしたち**は，イザヤ，エレミヤ，ダニエルなどのように，厳しい試練に遭っても，忠誠を保つ者になれます。」（ものみの塔1990年1月1日、27頁）

「神の預言者たちは何と立派な模範を残してくれたのでしょう。彼らは苦しみを耐え忍び，辛抱し，ほかにも敬虔な特質を示したゆえに，**エホバの名によって語る特権を与えられました。現代のエホバの証人であるわたしたちは**，彼らと同じように行動しましょう。」（塔1994年9月15日号20頁）

### 1982~1995年：新しい世が来るのは創造者の約束

「本誌は，1914年の出来事を見た世代が過ぎ去る前に平和で安全な新しい世をもたらすという，創造者の約束に対する確信を強めます。」（『目ざめよ！』1982年4月8日号～1995年10月22日号、p.4「目ざめよ！誌が発行される理由」）

「純粋に人間的な見地からすれば，1914年の世代が姿を消す前に，これらの出来事が生ずることはとてもあり得ないと思えるかもしれません。しかし，1914年の世代に影響を及ぼす予告された出来事のすべての成就は，比較的に遅い，人間の行動にかかってはいません。「すべての事が起こるまで，この[1914年の]世代は決して過ぎ去りません」というのがキリスト・イエスを通して与えられたエホバの預言の言葉です。（ルカ 21:32）そして，霊感による，信頼の置ける預言の源であられるエホバは，比較的短い期間に，み子の言葉の成就をもたらされます。―イザヤ 46:9，10; 55:10，11。」（塔84年10月1日、p.23）

* 1914年の出来事を見た世代が過ぎ去る前に終りが来ることが「エホバの約束」だと断言されている
* ただ断言するだけでなく「創造者の約束に対する確信を強めます」という表現によって、読者がその予言に100％の確信を持てるよう、13年間に渡り毎月教育をしてきた。
* この予言を「エホバの預言の言葉です」と紹介した。

### 関連する聖句

「『しかし，話すようにとわたしが命じたのではない言葉をあえてわたしの名において話し，あるいは他の神々の名において話す預言者，その預言者は死ななければならない。21 そして，あなたが心の中で，「エホバが話されたのではない言葉をどのようにして知るのか」と言う場合であるが，22 もし預言者がエホバの名において話しても，その言葉が実現せず，そのとおりにならなければ，それはエホバが話されなかった言葉である。その預言者はせん越にそれを話したのである。あなたはその者に恐れ驚いてはならない』」（申命記18：20-22）

「あなたの神エホバの名をいたずらに取り上げてはならない。その名をいたずらに取り上げる者をエホバは処罰せずにはおかないからである。」（出エジプト20：7）

「あなたは仲間の者に対する証人となるとき偽りの証言をしてはならない。」（同20：16）

### その他

* 世の終わりに関する予言の失敗：7回。
* 予言の失敗に関わる虚偽の説明：10回